

教 育 研 究 業 績

氏名 永井 優美
学位 博士(教育学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学	教育史、幼児教育史、保育者養成、保育カリキュラム	
主要担当授業科目	教育原理、幼児理解の理論と方法、保育内容総論、課題研究A 課題研究B、教職実践演習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 「教育原理」の授業実践における工夫	令和6年9月～	「2作成した教科書・教材」で示した『教育の理念と歴史』（橋本美保・遠座知恵）をテキストとして授業の予習・復習に活用している。また講義の授業の中でもアクティブ・ラーニングを意識し、グループディスカッションの時間を取り入れている。また幼児教育の教材であるフレーベルの恩物は実物を用意して、学生が直接触れて子どもの遊びについての理解を深める機会を提供している。歴史的な内容が多い中でも、学生が興味関心を持って積極的に講義を受講できるように、適時オリジナルプリントや視聴覚映像を用いて、教授内容への理解を促している。
2 作成した教科書、教材 『教育の理念と歴史』	令和6年9月	第5章「新教育運動の生起と展開」（第1節 新教育の理念、第2節 ヨーロッパにおける新教育、第3節 アメリカにおける新教育、72-84頁）および第7章「近代学校制度と授業の成立」（第1節 近代公教育の創始、第2節 近代学校教育制度の確立過程、第3節 国家主義教育体制への移行、第4節 教育方法の日本的受容の特質、102-113頁）を担当した（橋本美保・遠座知恵編、永井優美他）。「教育原理」の授業でテキストとしている。
『0～6歳児「言葉を育てる」保育-よくある疑問40&言葉あそび20-』	令和3年3月	幼児教育において言葉をどのように育んでいくかに着目し、現場の保育者にとっても参考にしやすい形でまとめた本書は日本国語教育学会監修のものである。保育内容総論の授業の中で、領域「言葉」や教育実践に関する内容の参考資料として活用している。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 特になし。		
4 実務の経験を有する者についての特記 事項 特になし。		
5 その他 「女性研究者へのキャリアパス」 学芸カフェテリア講座 東洋英和女学院大学生涯学習センター講座 講師	平成24年12月 平成26年12月 平成29年2月 平成29年10月 平成30年2月、9月 平成31年2月	東京学芸大学男女共同参画推進委員会の企画で行われた講演会において、研究者としてこれまでどのように歩んできたかなどの自身の経験について、研究者を目指す学生を対象に講演した（於東京学芸大学）。 東洋英和女学院大学生涯学習センター開催の講座「WMS 研究（カナダ・メソジスト婦人宣教師研究）」と「21世紀の子どもに生きよう」において、キリスト教教育に基づいた保育者養成・および保育実践の在り方について、研究者や実践者などを対象に歴史的題材を用いて連続的に講義した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許 司書 資格 取得	平成20年3月	

社会教育主事 資格 取得 運転免許(普通) 取得 保育士資格 取得	平成 20 年 3 月 平成 23 年 3 月 平成 23 年 11 月	東京都-096196、平成 25 年 4 月登録
2 特許等 特になし。		
3 実務の経験を有する者についての特記 事項 特になし。		
4 その他<外部資金獲得> ・特別研究員奨励費 ・研究活動スタート支援 ・若手研究 (B) ・若手研究	平成 24 年 ～ 平成 26 年 ～ 平成 28 年 ～ 令和 4 年 ～現在	「近代日本のキリスト教系保母養成機関における保母養成の実態と特質」 「保育者の専門的力量形成に関する比較教育史研究」 「保育者養成カリキュラムの開発と実践に関する日米間の比較教育史的研究」 「幼児期の教育と小学校教育の連携に関する比較教育史的研究」

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

著書, 学術論文等の名称	単著・共 著の別	発行又は発 表の年月	発行所, 発表 雑誌等又は 発表学会等 の名称	概要
(著書)				
1 『新・教職課程シリーズ第 2 巻 「教育の理念・歴史」』	共著	平成 25 年 9 月 (平成 26 年改訂版)	一藝社	第 10 章「日本の教育思想と学校の歴史 2 —近代公教育の形成」を担当した (田中智 志・橋本美保編、永井優美他、132-143 頁)。 概要は次の通りである。 第 1 節 近代公教育の創始 第 2 節 近代学校教育制度の確立過程 第 3 節 国家主義教育体制への移行 第 4 節 教育方法の日本的受容の特質
2 『明日へ翔ぶ —人文社会学の新視点-3』	共著	平成 26 年 3 月	風間書房	公益信託松尾金藏記念奨学基金編の論文 集である。永井優美他、 「J. マクドウェルの保育カリキュラム論— アメリカ進歩主義教育実践の導入」(51-66 頁)。 広島女学校附属幼稚園に赴任した J. マ クドウェルの年間保育計画や一日のスケジ ュール、また Japan Kindergarten Union の年報に掲載されたマクドウェルの講演記 録を分析することで、進歩主義教育を反映 した保育実践が、マクドウェルの指導のも と、同園で行われていたことを明らかにし た。
3 『大正新教育の思想—生命の躍 動—』	共著	平成 27 年 7 月	東信堂	第 8 章「樋口長市の自学主義教育論」を 執筆した。概要は以下の通りである (橋本 美保・田中智志編、永井優美他、256-277 頁)。 1 はじめに 2 樋口長市の経歴 3 樋口の自学主義教育論の特徴 4 川井訓導事件の真相 5 おわりに

4『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保姆養成機関を中心に—』	単著	平成 28 年 2 月	風間書房	<p>近代日本における保育者養成の実態と特質を、キリスト教系保姆養成機関を中心に明らかにした。概要は以下の通りである。</p> <p>序章 第 1 章近代日本における保姆養成の概況 第 2 章桜井女学校幼稚保育科における保姆養成の特質 第 3 章頌栄保姆伝習所における保姆養成の特質 第 4 章広島女学校保姆師範科における保姆養成の特質 第 5 章日本幼稚園連盟（JKU）の保姆養成に果たした役割 結章</p>
5『大正新教育の受容史』	共著	平成 30 年 1 月	東信堂	<p>本研究は大正新教育期の教育実践について受容史の方法によって多様な事例をもとに多角的に検討したカリキュラム史研究である。筆者は第一部「欧米新教育情報と日本の教育界」第一章「モンテッソーリ教育情報の普及」および第二部「国際的視点からのアプローチの可能性」第八章「甲賀ふじによる進歩主義保育実践の受容—保育法研究のプロセスに着目して—」を執筆している。</p> <p>橋本美保編・永井優美他</p>
6『大正新教育の実践—交響する自由へ—』	共著	令和 3 年 1 月	東信堂	<p>本研究は大正新教育期の教育実践を自由の視点から検討した研究であり、筆者は第Ⅱ部教育実践史からのアプローチ、第 13 章「ランバス女学院附属幼稚園における自由保育の実践—高森富士の保育論に着目して—」（361-388 頁）と題して幼児教育分野の論考をまとめた。高森が子どもの活動や自由を尊重する点、子ども理解が重要である点をアメリカの「コンダクト・カリキュラム」の影響によって見出していたことを指摘した。</p> <p>橋本美保・田中智志編著、永井優美他</p>
7『0～6 歳児「言葉を育てる」保育—よくある疑問 40&言葉あそび 20』（再掲）	共著	令和 3 年 3 月	東洋館出版社	<p>幼児教育において言葉をどのように育んでいくかに着目し、現場の保育者にとっても参考にしやすい形でまとめた本書は日本国語教育学会監修のものである。筆者は項目「語彙に広がりをもたせるためには」（50-51 頁）、「子どもの「なぜ?」「なんで?」への対応は」（52-53 頁）「子ども同士のけんかが起きたときには」（54-55 頁）「あいさつが苦手な子どもへの対応は」（56-57 頁）、「自分から話したがらない子どもへの対応は」（58-59 頁）を担当した。</p> <p>福山多江子・伊澤永修・大澤洋美・生野金三編著、永井優美他</p>
8『幼児教育史研究の新地平 上巻—近世・近代の子育てと幼児教育—』	共著	令和 3 年 7 月	萌文書林	<p>筆者は第 2 部「海を渡る幼稚園—幼稚園の成立とその世界的展開」の中の、第 6 章「アメリカにおける幼稚園の普及と展開—小学校教育との関係に着目して—」（161-182 頁）を担当した。</p> <p>太田素子・湯川嘉津美編著、永井優美他</p>

9『教育の理念と歴史』(再掲)	共著	令和6年9月	一藝社	第5章「新教育運動の生起と展開」(第1節 新教育の理念、第2節 ヨーロッパにおける新教育、第3節 アメリカにおける新教育、72-84頁)および第7章「近代学校制度と授業の成立」(第1節 近代公教育の創始、第2節 近代学校教育制度の確立過程、第3節 国家主義教育体制への移行、第4節 教育方法の日本的受容の特質、102-113頁)を担当した(橋本美保・遠座知恵編、永井優美他)。
10『大正新教育の実際家』	共著	令和6年10月	風間書房	第3章「和久山きそによる保育研究・実践の実態と特質—自然研究のプロセスに着目して—」(53-79頁)の執筆を担当。大正新教育運動を担った実際家の一人として頌栄保母伝習所教員であり、頌栄幼稚園の保母であった和久山きそを取り上げ、和久山の自然研究の実態と特質を明らかにすることを通して、一保母の成長プロセスを解明することができた。それはアメリカのネイチャー・スタディ運動の影響を先駆的に受けたものであり、自然研究センターの保育実践モデルを保育界に提供したと言える。 橋本美保編著、永井優美他
(学術論文)				
1(修士論文) 「明治期のキリスト教系私立女学校における保母養成の果たした役割—桜井女学校を中心に—」	単著	平成22年3月	東京学芸大学	日本で初めての私立の保母養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を取り上げ、キリスト教系保母養成の特質について解明した。同科では理論と実践をバランスよく組み込んだカリキュラムを編成し、卒業研究を行うなど、当時の保育者養成の水準に対して高度な内容を持つものであったことを明らかにした。
2「桜井女学校幼稚保育科の創設と保母養成の実際—卒業生の実践を手がかりに—」	単著	平成22年11月	『幼児教育史研究』幼児教育史学会、第5号、33-44頁(査読付)	これまで不明であるとされてきた日本で最初のキリスト教系保母養成機関である、桜井女学校幼稚保育科の実態を明らかにした。
3「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鉞の保育思想とその実践—室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して—」	共著	平成23年2月	『東京学芸大学紀要』東京学芸大学、総合教育系I、第62号、19-30頁	桜井女学校幼稚保育科第2回卒業生である吉田鉞という保育者の人物研究を中心に、彼女の保育実践の特質を考察した。特に吉田が主任保母となった室町幼稚園の保育項目を分析した結果、当時の日本の保育とは異なるアメリカ式の保育実践を行っていたことを指摘した。 永井(田中)優美・橋本美保調査執筆担当
4「国際幼稚園連盟(IKU)による幼稚園教員養成の標準化—連邦教育局報告書 <i>Kindergarten Training Schools</i> の分析より—」	単著	平成23年9月	『アメリカ教育学会紀要』アメリカ教育学会、第22号、43-57頁(査読付)	全米最大の保育者連合組織である国際幼稚園連盟(IKU)が進めた保育者養成の標準化について、1916年の報告書の特徴と、その作成過程を実証的に明らかにした。
5「キリスト教系女学校における附属幼稚園の教育的役割—桜井女学校を事例として—」	単著	平成24年3月	『学校教育学研究論集』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、第25号、1-13頁(査読付)	本論文では、特に、キリスト教系女学校附属幼稚園が果たした役割に焦点をあて、それが単に幼児教育のためのみならず、母親教育や幼稚園教員の養成のための場でもあったことを指摘した。
6(博士論文) 「近代日本キリスト教系保母養	単著	平成25年3月	東京学芸大学	博士論文では、これまでほとんど着目されることがなかったキリスト教系保母養成

成史—アメリカ式保姆養成の導入と展開—				機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。当時のわが国の保育実践並びに保姆養成は、主にアメリカからの幼児教育情報に基づいて行われていた。そのため、アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官公立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
7「日本幼稚園連盟（JKU）における保育者養成論—保育者の資質能力への共通理解の形成—」	単著	平成 26 年 9 月	『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野、第 33 号、107-122 頁	キリスト教系幼児教育・保育者養成の専門団体である 1906（明治 39）年に設立された日本幼稚園連盟（JKU）内で議論された保育者の資質能力について分析した結果、①研究的志向を持った保育者、②保護者支援の力量ある保育者という専門職としての保育者像が共有されていたことを解明した。
8「樋口長市の生活教育論—生命思想の影響に着目して—」	共著	平成 27 年 2 月	『東京学芸大学紀要』総合教育科学系 I、第 66 集、67-78 頁	大正新教育の精鋭の一人として知られる樋口長市の新教育研究の過程を検討し、彼の形成した生活教育論の特質について考察することを通して、川井訓導事件への樋口の関わり方についての通説の再考を試み、それについて再検討の可能性が あることを提示することができた。 永井優美・橋本美保・近藤めぐみ 調査執筆担当
9「保育者養成における実習の意義—実習の振り返りから見る学生の成長（その 1）—」	共著	平成 27 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 48 号、55-70 頁（査読付）	保育者を目指す学生にとって実習は保育者としての資質を向上させるために必要不可欠な機会である。短期大学 1 年次の最初の幼稚園教育実習におけるアンケート結果を分析し、学生が実習を通して身に付けた力量や自己課題について考察した。 福山多江子・永井優美 調査執筆担当
10「明治期広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラム開発—中心統合法の導入と展開を中心に—」	単著	平成 27 年 3 月	『カリキュラム研究』日本カリキュラム学会、第 24 号 15-26 頁（査読付）	進歩主義保育で知られる広島女学校附属幼稚園における、マコーレーやクックによる保育カリキュラム開発を、中心統合法に着目して検討し、同園における当時の保育の実態を明らかにした。
11「保育者養成における実習の意義（2）—学生にとっての PDCA サイクル「の重要性に着目して—」	共著	平成 28 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 49 号、89-101 頁（査読付）	保育者養成校の学生を対象にしたアンケート調査の結果を分析し、学生の保育現場での学びの事例を読み解き、学生がいかに PDCA サイクルの中で実習の経験を振り返っているかを明らかにした。 福山多江子・永井優美 調査執筆担当
12「幼稚園における学校評価基準資料の観点に関する—考察—実践的自己点検評価の基準と記述—」	共著	平成 29 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 50 号、53—66 頁（査読付）	本研究は、幼稚園の自己点検評価方法について考察したものである。保育日誌を基軸とし、保育展開の記録を基に策定される指導計画や実践の外部評価、期間を区切った総括評価などの客観的資料に基づく評価方法により、日々の保育の中で年間に渡り評価を行う利点についてまとめた。 安見克夫・福山多江子・永井優美・木埜下大祐

13「甲賀ふじのアメリカ留学と幼稚園教育実践」	単著	平成 29 年 10 月	『日本の教育史学』教育史学会紀要、第 60 集、32-44 頁(査読付)	本研究の目的は甲賀ふじ（1856-1937）による幼稚園教育実践の特質をアメリカの幼稚園教育との関係から解明することである。甲賀が先駆的な実践を行うことができたのは、アメリカ留学で最新の幼稚園教育に触れただけでなく、それをもとに科学的基礎にたつ児童研究に主体的・継続的に取り組んだことによることを明らかにした。
14「大正新教育期におけるモンテッソーリ教育法紹介の傾向と特質-外国教育情報の移入に着目して-」	単著	平成 29 年 10 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 51 号、49-59 頁(査読付)	大正新教育期に日本に初めてモンテッソーリ教育が流行したが、その流行の傾向を分析し、外国教育情報受容の特質について考察した。モンテッソーリ教育は大正新教育期に進歩主義教育が盛行する先駆けとなっており、幼児教育のみではなく広く教育界全体にインパクトを与えたものであったことを指摘した。
15「実践的指導力の育成を志向して-保育観の形成を通して-」	共著	平成 29 年 10 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 51 号、85-94 頁(査読付)	これからの日本において教員に求められる資質能力とはどのようなものであるか検討するため、第一に養成段階において教育実習が学生の保育職イメージに与える影響について分析した。第二に、新任保育者の保育観の変容過程とその要因を分析した。 福山多江子・生野金三・大澤洋美・永井優美 調査・執筆担当
16「主体的・対話的で深い学びの研究-幼稚園教諭養成課程における実践-」	共著	平成 31 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 52 号、35-49 頁(査読付)	保育者を目指す学生にとって、主体的・対話的で深い学びとはどのようなものであるのかについて、模擬保育を通して分析した結果、学生が保育実践の計画・実践をする中で、子どもの実態に基づき、子どもの主体性を重視することの意義に気づく過程が重要であることを解明した。 福山多江子・生野金三・大澤洋美・香田健治・永井優美 調査執筆担当
17「子どもの加減行為についての一考察」	共著	平成 31 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 52 号、13-22 頁(査読付)	本研究では、子ども同士の関係する場面、例えば、試行錯誤、葛藤、けんか、いざこざ、折り合いという場面における加減行為を分析した結果、表層部分ではなく、行為を表出するに至るまでの過程となる深層的な自己性の形成する要因に着目することの重要性を解明した。 大澤洋美・安見克夫・福山多江子・永井優美 調査執筆担当
18 「幼保小連携における学びの連続性に関する研究-主体的・対話的で深い学びの視点から-」	共著	令和 6 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 57 号、19-39 頁(査読付)	本研究は、幼保小連携における学びの連続性に関して、主体的・対話的で深い学びの視点から、幼児期の教育と小学校以降の教育との接続のあり方について多角的視点から検討したものである。幼稚園（保育所）と小学校の異同内容を把握した上で、小学校 1 学年の実践事例や領域言葉や国語科の視点からの事例を検討し、幼保小のカリキュラムの接続のあり様を示唆した。 永井優美・伊澤永修・高木史人・永井大地・生野金三 調査執筆、とりまとめ等担当（Ⅱ3「第 1 学年の研究授業に見る幼保小連携への視座」の箇所）
19 「戦前期における A. L. ハウの日米保育団体の交流に果たした役割-Japan Kindergarten」	単著	令和 7 年 12 月	保育学研究 第 63 巻第 2 号、103-114	本研究の目的は、A. L. ハウが日米の保育団体である JKU と IKU の交流に果たした役割を明らかにすることを通して、保育におけ

Union と International Kindergarten Union の関係性に着目して一]				る国際交流の意義を考察することにある。ハウは保育の質の向上を世界的に促進するため、保育者が広い視野で国際的かつ学術的な研究交流を行うことの必要性を示し、日米の保育者に互いに連携するよう啓蒙した。ハウは保育団体の国際交流事業における重要人物であり、日米保育の架け橋としての役割を超えて、実際の継続的な交流を生み出した主体であった。
(その他) ＜報告書・記録・辞典等＞				
1「明治期のキリスト教系私立女学校における保姆養成の果たした役割—桜井女学校を中心に—」	単独	平成 22 年 9 月	『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野第 29 号、110 頁	日本で初めての私立の保姆養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を取り上げ、キリスト教系保姆養成の特質について解明した。(修士論文要旨)
2 記録「教員養成は 4 年制か 6 年制か」	単独	平成 24 年 3 月	『FORUM』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、84-85 頁。	連合学校教育学研究科、合同ゼミナール分科会報告。分科会において博士課程の学生が教員養成は 4 年制か、6 年制かというテーマにそってディベートをした内容を記録・分析したものである。 司会担当
3「明治初期東京女子師範学校における保姆養成の創始と模索—幼稚園教員の専門性形成に関する一考察—」	共著	平成 24 年 3 月	『養成・実践・研修を結ぶ教師教育の在り方に関する実証的研究』(報告書)東京学芸大学、3-13 頁	日本で最初の保姆養成機関である官立の東京女子師範学校における保姆養成政策の変遷を、幼稚園教員の専門性への認識との関連から史実に即して分析した。
4「近代日本キリスト教系保姆養成史—アメリカ式保姆養成の導入と展開—」	単独	平成 25 年 8 月	『博士学位論文—論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、第 16 号、21-25 頁。	博士論文では、これまでほとんど着目されることがなかったキリスト教系保姆養成機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。当時のわが国の保育実践並びに保姆養成は、主にアメリカからの幼児教育情報に基づいて行われていた。そのため、アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
5「教育の本質をつかむ—教育史研究から見えてきたこと—」	単独	平成 25 年 11 月	『児童研究』聖心学園、第 665 号第 59 号第 4 号、4-5 頁。	保育者として成長するために、教育の本質をつかむという視点が重要であることを、A.L. ハウという人物の記した保育の目的を参照しながら論じた。
6「保育の歴史(明治)」「保育の歴史(大正～戦前)」「保育の歴史(戦後～現在)」「ヨーロッパの保育の歴史」「アメリカの保育の歴史」	共著	平成 28 年 8 月	『保育実践事典』幼少年教育研究所編、鈴木出版、398-407 頁	日本の保育の歴史について明治期、大正～戦前期、戦後～現在期にわたりその概要をまとめた。また、ヨーロッパの保育とアメリカの保育についても歴史的視点よりまとめた。
7「『子どものための哲学』によって子どもの思考力は育成されるのか—保育者養成校の授業における学生の子ども理解の深化—」	単独	平成 31 年 3 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 563、56-57 頁	コロンビア大学のマシュー・リップマンを中心に 1960 年代にアメリカで開発された教育プログラム「子どものための哲学」(Philosophy for Children, P4C) に着目し、幼児教育と保育者養成の視点から検討した。
8「必修教科・選択教科(科目)」	共著	令和元年 7 月	『教職用語	418-419 頁の「必修教科・選択教科(科目)」

			辞典』（改訂版）、橋本美保編、一藝社	を担当し、最新の動向についてまとめている。
9 記録「幼児期における言葉の育ち-言葉にならない思いをキャッチする-」	単独	令和元年 1 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 571、22 頁	日本国語教育学会、幼保部会分科会記録。
10「戦前日本キリスト教系保母養成機関における保母養成の特質-アメリカ人宣教師の保母像に着目して-」	単独	令和元年	『幼児教育史研究』第 14 号、42-54 頁。	シンポジウム記録。「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」というタイトルのシンポジストの一人として登壇し、その内容を学会誌上にまとめなおしたものである。
11「初期の言語環境の重要性-言葉のあふれた世界に住む-」	単独	令和 2 年 2 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 574、56-57 頁	『3000 万語の格差-赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』（ダナ・サスキンド、2018 年）に子どもとの関わり方のポイントとして「三つの T」が研究内容の実践への適用として提示されていることに触れ、初期の言語環境の重要性について分析した。
12「「ほめ言葉のシャワー」で進化する幼児の言葉-心が言葉を生み出す-」	単独	令和 2 年 12 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 584、56-57 頁	菊池省三が提唱したほめ言葉のシャワーの実践を幼児教育において実践した保育者について触れ、「幼稚園教育要領」の領域「言葉」との関連性について考察し、幼児期の総合的な遊びを中心とした学びのあり方について提示した。
13 “Higuchi Choichi”	単独	令和 3 年	<i>The Routledge Encyclopedia of Modern Asian Educators 1850-2000</i> , Routledge 116 頁.	1850 年から 2000 年にかけてアジアで活躍した教育者についての記された事典の中で、大正新教育期に活躍した樋口長市（1871-1945）の経歴や功績、果たした役割について記したものである。
14「幼稚園教員養成 (Kindergarten Teacher Training)」	単独	令和 3 年 10 月	『現代アメリカ教育ハンドブック 第 2 版』東信堂、293-294 頁。	アメリカ教育学会によって編集された現代のアメリカの教育に関する諸事情についてまとめた事典において、アメリカの幼稚園教員養成について記したものである。幼稚園教員養成の史的展開、近年の幼稚園教員養成の傾向等についてまとめた。
15「幼児の言葉の獲得過程における「加減」行為-身体知と言語の関係に注目して-	単独	令和 3 年 12 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 596、56-57 頁。	幼児期の未分化な状態において、諸能力は相互に関連し合い、総合的に発達していくことから、遊びを通じた総合的指導の原則をどの場面でも常に意識し、幼児に関わっていくことが重要である。本稿では特に身体知と言語の関係に注目し、1 歳半の子どもの「おもい」という言葉の使用と身体知との関係性を検討した結果、加減行為を言葉で言い表す姿がすでに見られることを指摘した。
16「幼児教育から小学校教育に連なる言葉の学びの土台-倉橋惣三の個人対話に注目して-」	単独	令和 5 年 1 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 609、62-63 頁	倉橋惣三によれば、教師が事前に準備して話す「おはなし」に劣らず「個人対話」が教育上、意味の多いことであるという。小学校教育へつながる親しみの心を土台とした「言葉の伝え合い」の力を育てることについて、倉橋惣三の個人対話論から検討した。
17 記録「言葉（幼保小連携）」	単独	令和 5 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、	日本国語教育学会、幼保部会分科会記録。「一人一人の思いの表出から見えてきたこと-特別支援教育の視点を手掛かりとして

			No. 619、17 頁	一」（小野成未）「生活経験や物語の読み合いから広がる遊び—子ども同士で楽しみ、広げていく物語と遊びの世界—」（有馬聡子）の提案に関する記録と討論についての記録を担当。
18 記録「豊かな言語生活を拓く 幼小連携について」	単独	令和 5 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 619、48-49 頁	日本国語教育学会、幼保部会講演会記録。佐々木晃による講演の記録を担当。「関係性を通して育つ乳幼児の言葉」「例えば。…行事にまつわる言葉の指導」「集団教育のダイナミックスが促す高度な思考」「幼小接続の教育課程について」の項目についてまとめた。
19「非認知能力の育ちを読み解く手がかりとしての幼児の言葉」	単独	令和 6 年 1 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 621、62-63 頁	心情・意欲・態度として保育現場に浸透している資質・能力は、近年、非認知能力として知られるようになってきている。非認知能力を育むとはいかなるものか、実践事例を通して幼児期の教育の総合的な指導のあり方についてまとめた。
21「児童期の読むこと・書くことにつながる幼児期のプレリテラシー—フレーベルの『人間の教育』にみる言語発達における援助のあり方—」	単独	令和 6 年 9 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 629、62-63 頁	言語の発達を促す関わりについて、幼稚園の創始者フレーベル（Fröbel, Friedrich Wilhelm August 1782~1852）の『人間の教育』（1826 年）から、幼児期の教育のみならず児童期の教育にも重要な視点を持って子ども言語発達における援助のあり方について考察した。
20 書評「熊田凡子著『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って—』」	単独	令和 6 年 10 月	『日本の教育史学』教育史学会、第 67 集、138-141 頁	熊田凡子による『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って—』（2022 年、教文館）の書評を行った。
21 記録「実践に見る幼保小の接続」	単独	令和 6 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 631、17 頁	日本国語教育学会、幼保部会分科会記録。「架け橋期に育とうとする子どもの力を見つめる～「架橋研」における保育・授業実践 幼保小で協議を重ねる中で」（親泊絵里子）「思いを言葉で伝え合い表現する子どもを育むために～小学校入門期の実践から～」（渡邊奈穂子）の提案に関する記録と討論についての記録を担当。
22 記録「架け橋期の課題と取組」（幼小の接続について）	単独	令和 6 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 631、49-50 頁	日本国語教育学会、幼保部会講演会記録。安見克夫による講演の記録を担当。「幼小の架け橋期の取組」「幼小連携と架け橋期での課題」の項目についてまとめた。
23 記録「研究協議 幼小の学びを繋ぐ—分科会からの流れを受けて—」	単独	令和 6 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 631、49-54 頁	シンポジスト及び指定討論者らによる研究協議の記録をまとめた。分科会の提案を受けて幼小小の連携・接続についての成果や課題を掘り下げたものである。
24 記録「校種別分科会：1 幼稚園・保育所 幼小の連携について」	単独	令和 7 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 643、17 頁	「架け橋期における言葉の育ち・指導の工夫を探る～幼児の中に「問い」が生まれていくプロセスを見つめて～」（親泊絵里子 東京・台場幼）、「幼小の学びをつなぎ、子どもの『問い』を育む—架け橋期の先生の関わりと環境づくり—」（渡邊奈穂子 岩手・滝沢東小）の二つの提案がなされた。
25 記録「幼保シンポジウム 研究協議 子どもの主体的対話力の質を考える—適切な対話が言語感覚を高める—」	単独	令和 7 年 11 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 643、56 頁	本シンポジウムにおいては、京都教育大学附属幼稚園の高野史朗先生より「幼児期の「対話」について考える—3 歳児の事例を中心に—」というタイトルで、東京成徳短期大学・板橋富士見幼稚園の安見克夫先生より「主体的活動を介した教師の問いと子どもの問い—豊かな「生活の言葉」を育む環境—」

				というタイトルで、話題提供がなされた。
<口頭発表> 1「明治前期におけるキリスト教系私立女学校保姆養成課程の特質—桜井女学校の事例から—」	単独	平成 22 年 7 月	日本カリキュラム学会第 21 回大会、於佐賀大学(口頭)	日本で初めての私立の保姆養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を取り上げ、キリスト教系保姆養成の特質について解明した。
2「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鍼の保育思想とその実践—室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して—」	単独	平成 22 年 12 月	幼児教育史学会第 6 回大会、於長野県短期大学(口頭)	桜井女学校幼稚保育科第 2 回卒業生である吉田鍼という保育者の人物研究を中心に、彼女の保育実践の特質を考察した。特に吉田が主任保姆となった室町幼稚園に関する部分においては新知見を提示した。
3「桜井女学校幼稚保育科卒業生亀山貞子の子ども観と保育観」	単独	平成 23 年 5 月	日本保育学会第 64 回大会、於玉川大学(口頭)	桜井女学校幼稚保育科卒業生である亀山貞子がいかなる子ども観と保育観を有していたかを、亀山の卒業論文などを分析することで検証した結果、幼児教育の知識や技術のみならず、聖書や英文学、教育原理など幅広い知見がその土台となっていることを明らかにした。
4「1900 年代アメリカにおける幼稚園教員養成の実状—国際幼稚園連盟(IKU)による養成カリキュラムの標準化—」	単独	平成 23 年 7 月	日本カリキュラム学会第 22 回大会、於北海道大学(口頭)	全米最大の保育者連合組織である国際幼稚園連盟(IKU)が進めた保育者養成の標準化について、1916 年の報告書の特徴と、その作成過程を実証的に明らかにした。
5「養成段階での教師教育の在り方に関する一考察—戦前日本の幼稚園教員養成機関における養成の特質—」	単独	平成 23 年 12 月	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科第 8 回研究討論会、於弘済会館(口頭)	日本で最初の保姆養成機関である官立の東京女子師範学校における保姆養成政策の変遷を、幼稚園教員の専門性への認識との関連から史実に即して分析した。
6「近代日本キリスト教系保姆養成機関における保姆養成の実態と特質」	単独	平成 25 年 2 月	日本教育史学会、於謙堂文庫(口頭)	キリスト教系保姆養成機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官公立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
7「保育者の資質能力への共通理解の形成—JKU の役割に注目して—」	単独	平成 25 年 5 月	日本保育学会第 66 回大会、於中村学園大学・短期大学部(口頭)	幼児教育関係の在日宣教師による日本幼稚園連盟(JKU)において、どのような保育者像が共有されたかについて考察した。
8「広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラム—アメリカ進歩主義教育理論の影響を中心に—」	単独	平成 25 年 7 月	日本カリキュラム学会第 24 回大会、於上越教育大学(口頭)	進歩主義幼稚園教育を受容した広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラムの特質とその改造過程について分析した。
9「M. M. クックの保姆養成論」	単独	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会、於椋山学園大学(口頭)	戦前日本の保育界を主導したキリスト教系保姆養成校である広島女学校保姆師範科(後のランバス女学院保育専修部)の指導者である M. M. クックの保姆養成論の特質について発表した。
10「学生の実習に対する意識と成果について」	共同連名	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会、於椋山学園大学(ポスター)	保姆養成校の学生を対象に行ったアンケート調査の結果を分析し、学生が実習先でどのようなことを学び、それをいかに省察したかについて検討した。
11「甲賀ふじのアメリカ留学と幼	単独	平成 27 年 9	教育史学会	戦前日本の保育界における実践的指導者

幼稚園教育実践」		月	第59回大会、 於宮城教育 大学（口頭）	である甲賀ふじのアメリカ留学の実態を報告した。
12「学生の実習に対する意識と成果について(2)―保育者の言葉かけの視点から―」	共同連 名	平成28年5 月	日本保育学 会第68回大 会、於椋山学 園大学（ポス ター）	実習を終了した保育者養成校の学生に、保育者の子どもに対する言葉かけを省察させ、その内容を分析した。そのことにより、実習の成果と学生の保育に対する意識の変化について考察した。
13「豊明幼稚園における甲賀ふじの保育実践―幼小連携カリキュラムを手がかりに―」	単独	平成28年7 月	日本カリキ ュラム学会 第27回大会、 於香川大学 （口頭）	日本女子大学附属豊明幼稚園における甲賀ふじの保育実践の特質を、日本女子大学附属豊明小学校との幼小連携カリキュラムを手がかりに考察した。日本では1920年代に紹介され始める幼小連携という取り組みが、豊明幼稚園及び小学校では先駆的に意識されていたことを明らかにした。
14「19世紀末から20世紀初頭のアメリカにおける日本の保育実践に対する認識―A. L. ハウの影響を中心として―」	単独	平成30年5 月	日本保育学 会第71回大 会、於宮城学 院女子大学 （口頭）	アメリカ人宣教師 A. L. ハウがいかなる経緯で International Kindergarten Union(アメリカの幼児教育専門組織)の会員となり、同組織においていかなる活動を行ったのか、その実態を明らかにし、アメリカ保育界が日本といかなる接点を持っていたかについて考察した。
15「保育者養成における指導計画作成に関する一考察―アクティブ・ラーニングの形式の授業を通して―」	共同連 名	平成30年5 月	日本保育学 会第71回大 会、於宮城学 院女子大学 （ポスター）	教育課程総論の授業において実施したアクティブ・ラーニング形式の指導案作成の成果と課題を検討した結果、子どもの主体性を重視した保育のあり方など、グループで話し合う中で理解を深めた学生がいたが、グループによって学びの質に差が生じたことから、指導のあり方を再構成すべきことがわかった。
16「幼児期の遊び「加減」の行為が育てる身体知の研究(2)―体験的学び「加減」行為から習得する言語感覚―」	共同連 名	平成30年5 月	日本保育学 会第71回大 会、於宮城学 院女子大学 （ポスター）	本研究においては、体験的学び「加減」行為から習得する言語感覚に着目し、加減と言語（副詞的言葉を含む）発話との関係を明らかにした結果、副詞の産出は認められるものの、一概にその行為と副詞の産出が同定できるとは限らないことが明らかとなった。
17「戦前日本キリスト教系保母養成機関における保母養成の特質―アメリカ人宣教師の保母像に着目して―」	単独	平成30年12 月	幼児教育史 学会第14 回大会シン ポジウム（シ ンポジスト）	戦前日本のキリスト教保母界をリードした二人のアメリカ人宣教師の保母像や養成に対する意識を中心に、キリスト教系保母養成の水準について質的側面から検討した結果、広く日本、アメリカの保母養成の実態を比較することで、キリスト教系保母養成が日本の同時代の養成レベルを超え、アメリカのそれに近いものであったことが明らかとなった。
18「頌栄幼稚園保母・保母伝習所教師和久山きそによる保育研究・実践の実態と特質―自然研究のプロセスに着目して―」	単独	令和6年2月	大正新教育 の実際家研 究会	和久山きその実践的保育研究の実態を明らかにし、特に和久山が課題意識をもって取り組んだ自然研究に関連する保育研究と実践の特質を検討した。それは、子どもの自然物への興味や疑問に応じることを重視したもので、ネイチャー・スタディの受容を通して科学的視点から自然研究を追求した実践であった。ここに保育者の成長プロセスが見られる。
19「頌栄幼稚園における和久山きその保育研究・実践の特質―ネイチャー・スタディの影響を中心に―」	単独	令和6年7月	日本カリキ ュラム学会 第35回大会、 於筑波大学 （口頭発表）	和久山きその保育研究・実践の展開について検討した結果、その特質として次の三点を挙げることができた。第一に、フレーベルの教育理念の研究を通して自然研究の目的を見出したことである。第二に、自然物への子どもの疑問による自発的な研究活動を尊重した点である。第三に、ネイチャー・スタディの影響を受けたことで、科学的視

				点から自然物を分析する手法を獲得し、観察を中心とした自然研究を展開していったことである。
以上、旧姓田中で執筆・発表したものもある。				